

株式会社堀川林業  
秋田県仙北市



PC138USエレベータキャブ仕様で  
木材を安全に高く積み上げることが可能に

## 使う側が要望を見て 作る側が現場を見 る

「不具合を連絡すると、『その症状は堀

- バイオマス用チップで未利用材の有効活用

堀川林業では、2015年に木質バイオマス発電の燃料用チップ製造工場の操業を開始した。年間約3万tのチップを製造している。

長年築き上げてきた信頼は、新しい世代にも受け継がれているようだ。

「コマツは機械が壊れにくいということもありますが、トラブルがあつたときにすぐに対応してくれることが一番うれしいですね」

林業は流れ作業なので、1台が故障すればすべての工程が止まる。

「1日も作業を止めたくないで、機械は『サービス』で選ぶようにしています。その結果がコマツ。コマツ秋田のサービスには満足していますよ」

長年築き上げてきた信頼は、新しい世代にも受け継がれているようだ。

「木質バイオマス燃料用原木は需要が増えていて、価格は2年間で2倍になっています」

堀川さんが言うように、林業が盛んな秋田県でも燃料用原木は供給不足気味で、値が上がっているそうだ。県内では来春にも木質バイオマス発電所が新たに1基稼働開始する。

チップは原木を細かく砕くので、材木として使えなかつたC材、D材と呼ばれる未利用木も活用できる。今まで費用をかけて処分していた材が売れるのだからその差は大きい。チップ製造は今では売上の25%を占める柱になっている。

チップを製造する田沢湖工場や原木のストックヤードで使われている機械もほとんどがコマツだ。

ストックヤードでは、PC138USのエレベータキャブ仕様が大量の木材を5m近い高さに積み上げていた。

「視線が高くなるので、積み上げ面が確認でき、安心して作業できます」と、自ら操縦する堀川さんは、満足げだ。最新の機械をいち早く取り入れるのも、堀川林業のコマツに対する信頼の証だらう。

川林業さんだけです」と言われることが多いんですよ」

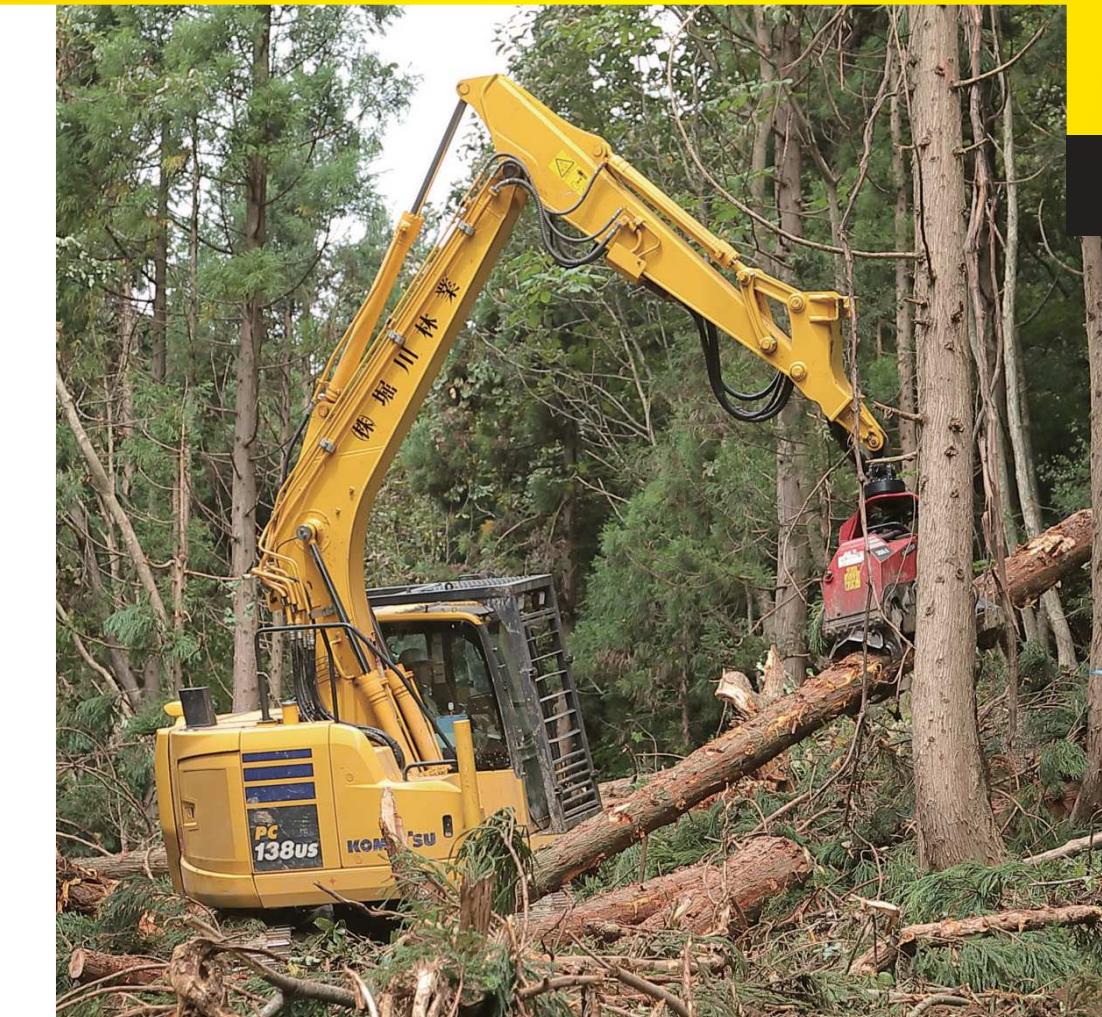
考えられる原因是2つ。「つ堀川林業は機械年間稼動時間が非常に多い為、不具合が発生するまでの期間が短い事。もう一つはメーカーが想定するより厳しい現場で使用するということだ。

「とは言え、プロが作る機械ですから『使い方次第で壊れます』というのは許されません」

そこでコマツ秋田では年に1回、石川県・栗津工場のスタッフを秋田に呼び、「林業技術交流会」を行っている。お客様・販売店・メーカーが直接顔を合わせ、機械に関する意見を交換しあう場を作るという試みだ。特にお客様とメーカーが直接意見



コマツ秋田の三戸忍営業部長(右)と、  
コマツ秋田はサポートする「秋田林業大学校」を通じて堀川林業の若手人材採用にも貢献



山林の狭いスペースで玉切り作業をするPC138US/パルメット仕様



秋田スギの生産量では県内トップクラスを誇る株式会社堀川林業。早くからコマツの林業機械を導入し、伐採から製材、あるいは木質バイオマス用チップ製造まで一貫して行っている。今も林業を通した地域の活性化のため、生産性の向上に挑んでいる。

## 機械で集材の効率を上げ バイオマスで利用を拡大

「秋田県では年間140万m<sup>3</sup>のスギ材を生産しています」と、堀川林業代表取締役社長の堀川義貴さんが教えてくれた。「一方、スギの木は年間300万m<sup>3</sup>育っていると言われています」



株式会社堀川林業代表取締役社長 堀川義貴さん

# 林業の機械化で生産性の向上を図る チップ製造で木材の新しい可能性も

つまり、世界では森林の乱伐による砂漠化が問題になっているというのに、日本では森林の成長に伐採が追いついていないというのが実情だ。資源はたくさんあります、急峻な地形で木の伐採、運搬が困難だから。

堀川林業では早くから林業機械を導入し、安全性と生産性を向上させてきた。「父の代から機械による効率化は徹底してきたので、私が入社したときには通りの林業機械はそろっていましたね。当時からほとんどコマツでした」

そう言う堀川さんは、2年前に父親の義美氏(現会長)から社長業を引き継ぎ、現場に出ることは少なくなつたが、ハーベスター、グラップル、フォワーダなど、先進の林業機械を使いこなす。



木質バイオマス燃料用チップの工場では1日150tのチップを製造